

松本エリア

松本市、塩尻市、安曇野市、麻績村、生坂村、山形村、朝日村、筑北村
お問い合わせ先 松本地域振興局農地整備課 ☎0263-40-1919

安曇野の縦堰と横堰

【所 在】松本市、安曇野市
【築 造】平安時代～江戸時代

安曇野市や松本市西部の水田地帯は、幾つもの河川によって形成された複合扇状地が広がっており、立田堰、湯澤堰、羽原堰、飯田堰、田多井堰など、古くは平安時代から鎌倉時代にかけて開削されたといわれている用水路が多数あります。

これらの水路は、傾斜に沿ってスキースの直流降のように上から下へ縦方向に下流して水田へかんがいしていることから、「縦堰」と呼ばれます。緩やかな傾斜がいされる水田は、扇状地の扇端部に近い平坦な地域に広がっており、扇状部は用水を導くことができず不毛の地となっていました。

人々の長年の願であった扇状部に水田を拓くために造られたのが、等高線に沿って緩やかに流れる「横堰」です。1654年の矢原堰の開削を皮切りに、新田堰、勘左衛門堰、捨ヶ原堰、掘廻堰が開削され、この地は一大穀倉地帯へと発展しました。横堰は、それまでに開削された幾つもの堰や河川をも横切らなくてはならず、極めて高い測量技術や土木技術が求められ、これらの堰を開削した先人たちの偉業は今も語り継がれています。

1 じっかきせ 捨ヶ堰

【所 在】安曇野市、松本市
【築 造】貞享2年(1685年)
【管理者】長野県捨ヶ堰土地改良区

江戸時代後期の1816年、大庄屋の等々力孫一郎らは10の水々に、約1,000haの水田を開田するため、奈良井川から取水し、複合扇状地の標高約570mの等高線に沿って3,000分の1という緩勾配で水を導くことを考えました。近代的な測量器や土木技術がない中で、わずか3ヶ月という驚異的な早さで築造するという偉業を成し遂げ、安曇野が県下有数の穀倉地帯として発展する礎を築きました。

2 あずまがわどうしゅうこう 梓川頭首工

【所 在】松本市
【築 造】昭和25年(1950年)
【管理者】中信平土地改良区連合

平安時代以降、梓川から取水する幾つもの堰が築かれましたが、僅かな水をめぐり水争いが繰り返されていたため、昭和6年に複数の堰を統合して取水する赤松頭首工が造られました。しかし、土砂の堆積などで十分な取水が困難になり、昭和25年、上流に県下最大の取水量を誇る梓川頭首工が新設されたことで、中信平は水稲、りんご、レタス、スイカ、長芋などの一大産地へと発展しました。

3 かんまきもんせき 勘左衛門堰

【所 在】安曇野市、松本市
【築 造】貞享2年(1685年)
【管理者】長野県勘左衛門堰土地改良区

奈良井川の小変淵(松本市島立)から取水し、梓川を横断して安曇野の中央部から万水川に至るまで、等高線と平行に流れる構構です。安曇郡の代官二木勘左衛門らが1662年に着手し、水路勾配の管理や河川の横断等に当時の技術を駆使し、23年後の1685年に完成しました。梓川の横断部は大雨のたびに流出しましたが、井掛(現在の土地改良区)が中心となって復旧し、現在までその流れを襲われています。

4 やほらせき 矢原堰

【所 在】安曇野市
【築 造】享保3年(1654年)
【管理者】安曇野市矢原堰土地改良区

扇川に川を求め、穂高神社先の穴ノ川まで等高線に沿って流れる構構です。1654年、矢原村(安曇野市穂高)の庄屋臼井弥三郎は、度重なる失敗にもめげず松本藩に建設許可願いを出し続け、不屈の精神をもって開削し、通水を成し遂げました。この成功は、横堰の先駆者として後世の勘左衛門堰、捨ヶ堰などに引き継がれ、不毛の原野は米どころへと変貌を遂げました。

5 しよせき 四ヶ堰 円筒分水

【所 在】塩尻市
【築 造】昭和9年(1934年)
【管理者】松本市奈良井川土地改良区

松本市別荘地区の村井町、小夏、野溝、平田の旧4村をかんがいの用水路です。塩尻市飯石地域の奈良井川右岸から七ヶ堰と取り水した後、奈良井川左岸の三区堰を分岐して、長野道塩尻北インター横の円筒分水まで、約3.2kmを分水下しています。円筒分水は、県内でも貴重な円形の分水施設で、昭和9年に初代が完成し、現在の施設は昭和20年代半ばに改修された2代目です。

6 あみすこ 美鈴湖

【所 在】松本市
【築 造】昭和2年(1927年)
【管理者】松本市

安土桃山時代に信濃国松本藩によって築かれた人造湖で、古くは「芦の田池」と呼ばれていましたが、1953年に美鈴湖と改名されました。湖の形状が鈴に似ていることや、信濃の佳句「美鈴(みすず)かる」に由来するなどの説があります。戦後の食糧増産期には、用水不足が深刻化したことにより大改修が行われ、現在では250haの水田を潤しています。

南信州エリア

飯田市、松川町、高森町、阿南町、阿智村、平谷村、根羽村、下條村、赤木村、天龍村、泰阜村、泰阜村、赤木村、豊丘村
お問い合わせ先 南信州地域振興局農地整備課 ☎0265-53-0417

1 いづみら井 伊賀良井

【所 在】飯田市
【築 造】室町時代
【管理者】北下区財産区

中央アルプスを源とする一級河川松川から取水している伊賀良井の起源は古く、室町時代には既に存在していたともいわれています。飯田藩時代には、用水管理の組織が確立されており、地元へ密着した井守(いもり)と呼ばれる役名は今も引き継がれています。平成14年から20年に行った改修事業では、玉石積みを採用し、生態系と景観に配慮した構造となっています。

2 きまきうら原井 帰牛原井

【所 在】赤木村
【築 造】明治3年(1870年)
【管理者】帰牛原井水組合

帰牛原地帯では、江戸時代初期から水量が豊富な加々野川からの取水を切望していましたが、下流の取水権者との調整が難しく、明治時代にはようやく工事着手になりました。切り立った断崖絶壁の岩を人力で削って山腹水路を通し、岩盤をくり抜いてトンネルを造る、まさに命がけの難工でした。明治3年、念願の帰牛原井が完成し、水田の面積が10倍に増えたといわれています。

3 あらい 新井

【所 在】飯田市
【築 造】昭和44年(1969年)
【管理者】新田区財産区

その起源は古く、平安時代には存在していたともいわれていますが、幾度もの山崩れにより廃棄されていました。江戸時代初期、山本長左衛門は飯田藩に新井の修復工事を願ひ出て聞き届けられ、わずか3日間で井形を掘り進めたという記録があります。飯田藩時代には確立された井守(いもり)と呼ばれる責任者の役名は今も引き継がれ、現在は新田区財産区が新井の管理を行っています。

4 りゅうどういつかんすいりょう 竜西一貫水路

【所 在】飯田市、松川町、高森町
【築 造】昭和44年(1969年)
【管理者】長野県竜西土地改良区

駒ヶ根市にある吉満ダムから取水し、中川村で発電している南岡発電所の放水水路の水を利用して、飯田市、松川町、高森町の天竜川右岸沿いの農地約700haを潤しています。昭和初期までは、天竜川から8ヶ所の取水口で取水していましたが、洪水のたびに流され莫大費用と労力を費やってきました。昭和23年から国営事業を皮切りに大規模な改修が行われ、現在の姿となりました。

5 りゅうどうい 竜東井

【所 在】豊丘村、青木村
【築 造】昭和31年
【管理者】竜東井

旧河野村を受益地とする「間夫井(まいふ)」と旧神柳村、青木村を受益地とする「竜東一貫水路」を統合して整備されたのが始まりです。間夫井の歴史は古く、1677年に天竜川の取水口が築造され新田を潤しました。竜東一貫水路は旧河野村八王寺池を取水口とし、昭和16年に整備されました。その後昭和28年に被災した高取水口は、昭和31年に移動・統合され竜東井として完成しました。

6 りゅうどういつかんすいりょう 竜東一貫水路

【所 在】飯田市、松川町、青木村、豊丘村
【築 造】昭和55年(1980年)
【管理者】長野県小沢川土地改良区

小沢川総合開発事業の一環として、昭和39年に東宮かんがい排水事業が採択され、昭和55年に完成した水路は、天竜川左岸の農地を潤しています。トンネル21ヶ所、サイフォン4ヶ所、分水工32ヶ所、放水口5ヶ所を含む総延長16.8kmの水路の完成により、水の乏しかった竜東地区に畑地かんがいが整備され、農業の近代化が図られました。

7 ごかようすい 五ヶ用水

【所 在】安曇野市
【築 造】天保3年(1832年)
【管理者】五ヶ用水水利組合

高瀬川を水源とする内川用水から分岐し、旧5村の水田を潤す延長12kmの水路です。目下の川には豊富な流れがあるものの段丘上には水が無く、雑穀や芋しか栽培できなかったため、庄屋茂左衛門が家財や庄屋の役目も放棄し断崖を断り続けた結果、1831年に工事に着手することができました。山腹の斜面を掘り、谷を越えるための橋を何ヶ所も造り、わずか7ヶ月余りで完成させました。

8 はたな堰 波田堰

【所 在】松本市
【築 造】明治8年(1875年)
【管理者】東筑摩郡波田堰土地改良区

高台に位置していたため水源が乏しく、江戸時代までは高い年貢に苦しんでいましたが、村の惨状を聞いた庄屋の波多摩左衛門が私財を投じ、明治2年、開削工事に着手し、明治8年に完成を遂げました。現在では、上流部に遊歩道や四阿を整備し憩いの場となっており、地域住民が水に親しむイベントや保全活動が行われているほか、小水力発電施設も設置され、環境学習にも活用されています。

諏訪エリア

岡谷市、諏訪市、茅野市、下諏訪町、富士見町、原村
お問い合わせ先 諏訪地域振興局農地整備課 ☎0266-57-2914

坂本養川の線越堰

八ヶ岳の裾野に広がる田園風景は、坂本養川の考案した「線越堰」という仕組みによって、水田開発が行われ、集落が形成されたことによるといえます。養川の功業は水不足の地域に用を遣っただけではなく、水争いの絶えなかった地域全体の水利体系を見事に再編成したことにもあります。

比較的水量が豊富な滝之湯川の水を水不足地帯に送るため、幾つもの河川を横断方向に結び水路を開削し、小川などから水を集めながら順繰りに送り、かつ、沿線の用水配分を見直し、既存の水路改良を行いました。滝之湯堰沿いには坂本養川の彫像が設置されており、地域の偉人として語り継がれています。

期別	堰名
天明5(1785)	滝之湯堰
天明6(1786)	二之湯堰
寛政3(1791)	坪之湯堰
	鳴釜堰
寛政4(1792)	車沢堰・指之屋堰
	立川川乙事堰
	程久保堰
寛政11(1799)	相之湯堰
寛政12(1800)	柳川三ヶ村沙
	棚田堰
	矢野倉堰

9 ちかどういけ 千鹿頭池

【所 在】松本市
【築 造】貞享2年(1685年)
【管理者】神田水利組合

江戸時代初期に築かれた農業用ため池です。当時、旧神田村が諏訪高島原の飛び地とされ、隣接する松本藩の領地内から水を引くことができなかったために築造されたといわれています。ため池の隣には、1714年建造の千鹿頭神社が奉られ、朱塗りの鳥居はため池との景観を織りなしており、周辺の遊歩道も多くの人々を楽しませています。

10 みどり湖 緑の湖

【所 在】塩尻市
【築 造】昭和27年(1952年)
【管理者】塩尻市

昭和27年に築造された農業用ため池で、当時、向坂湖池と呼ばれていた。夏はボートが浮かぶなど、冬には結氷した湖面をスケートリンクとするなど、観光地としての利用も多かったことから、観光協会が公募により、「みどり湖」と呼ばれるようになりました。湖畔に咲き誇る水芭蕉も美しく、四季を通して親しまれています。

1 たきのゆせき 滝之湯堰

【所 在】茅野市北山～豊平
【築 造】江戸時代(1785年頃)
【管理者】茅野市滝之湯堰土地改良区

旧沢村(現茅野市宮川)の名主であった坂本養川が、高島藩へ献呈したことにより開削された最初の水路です。「芝瀧(しばたえ)」と呼ばれる取水方法は、河川を木・枝葉・石で堰き止めて取水する構構で、河川下流にも水を流すことを前提としています。堰崩は、洪水の影響を受けにくい硬い岩盤を探し、くり抜いて水を引き込む工夫がされた岩盤掘削水路となっている区間もみられます。

2 おおかわらせき 大河原堰

【所 在】茅野市北山～玉川
【築 造】江戸時代(1792年頃)
【管理者】茅野市大河原堰土地改良区

「乙女瀧(おとめがせき)」という人工の滝(落差工)があります。これは、滝之湯川から湧き出た湧き水を、流川を横断させるために造られたもので、河岸の急峻な崖を一気に落下させ、集水した水を掛橋(かけはし)で渡し、流川からの補給水と併せて下流へ導水しています。この滝が農業用水路の一部(落差工)であることが知っている人は少ないですが、現在では茅野市の観光名所のひとつとなっています。

11 かみいりか 上生坂の揚水機

【所 在】生坂村
【築 造】大正元年(1912年)
【管理者】上生坂耕地整理組合

生坂村は、扇川沿岸にわずかな平地があるものの、村のほとんどが急傾斜地です。水田開発は村民の悲願でしたが、農地である土地が高台にあり、当時の技術では実現できませんでした。そこで明治の末期、「県下初の揚水機」が設置されました。当時の原動機は蒸気機関の歯車伝達で、燃料は石炭を使いました。大正2年6月5日、大勢の人に見守られる中で行われた試運転は感動的だったそうです。

12 いちのかわなた 市野川棚田

【所 在】麻績村
【築 造】不明
【管理者】市野川集落協定

市野川棚田は、麻績村の重要な農業資産です。標高1000mの崖端から引く清らかな水と、有機肥料を主体とする環境にやさしい農法が高品質な米やもち麦を育んでいます。ここでは、高齢化による耕作放棄地の増加に対し、ドローンによる水田直播などスマート農業を積極的に実践し、「棚田の農業を次世代へ」をビジョンに掲げ、革新的な技術を美しい景観を守り続けています。こどもたちへの農業体験も行ってあり、信州の棚田農業の未来を担う、活気あふれるフィールドです。

3 やなわかんさんせき 柳川三ヶ村沙

【所 在】茅野市豊平～原村
【築 造】江戸時代(1686年頃)
【管理者】原村

柳川と立川川に挟まれた地域は、神野(こうや)と呼ばれる諏訪明神の御狩場であったといわれ、農地として利用されてきました。江戸時代にこの神野を新田開発するにあたり、柳川を水源として、1686年に開削されました。原村の柏木・弘沢・ハツ手の三新田村の恩恵を受けた高島藩が、2,000人を超える賦役を得て、僅か20日程度で建設したといわれています。

4 ごうどせき 神戸沙

【所 在】富士見町富士見
【築 造】江戸時代(1805年頃)
【管理者】富士見町

富士見町西山地区は、地形的に慢性的な水不足地帯であったため、用水確保は地域の悲願でした。最初は、程久保川から取水し武智川を越えて渡した1本の水路「程久保川」に変更が行われ、武智川横断部を越らねばならぬこととなり、程久保川の水は「程久保川」、武智川の水は「神戸沙」として導水されることとなり、飛躍的に農地の面積が図られました。

7 たてしほ 蓼科湖の円筒分水工

【所 在】茅野市北山
【築 造】昭和27年(1952年)
【管理者】茅野市滝之湯堰土地改良区

滝之湯堰の主な水源となっている小沢川は水温が低いため、水を進めるため池として蓼科湖を昭和27年(1952年)に築造しました。ため池の築造箇所は、久保田原の取水源だったことから、江戸時代からの取り決めにより、滝之湯堰と久保田原は9:1を循環する必要があります。円筒分水により分水することで水争いも減りました。さらに毎年の芝漕え作業が軽減されるなど、水管理の効率化が図られました。

8 うぼしほ 烏帽子ため池

【所 在】富士見町落合
【築 造】昭和26年(1951年)
【管理者】富士見町

標高1,000m近い高層で水稲を栽培するため、水不足解消と水を温めるため池として築造されました。生活用水や防火用水としても利用されており、地域用としても大切に管理されてきました。最近では、維持管理や将来の利用を承えるため、茅野市・平岡両区の人たちが、憩いの場として活用する。子供たちの意見も聞きながら、水辺デッキ等の観水や景観にも配慮した整備が行われています。

5 みゆかい池 御射鹿池

【所 在】茅野市豊平
【築 造】昭和8年(1933年)
【管理者】茅野市湖東豊原土地改良区

日本画の巨匠・東山魁夷の作品「緑響く」の題材として有名なため池で、木々の緑を映すバルトブルーの水と、防火用水としても利用されています。冷帯常緑樹のうえ、流しの水は透明で、ため池の水を蓄積し温めることにより、水の収穫量は大きく増加しました。湖底には酸性水を好む水草やツバキなどが繁茂し、湖面には木々がきれいに映り、ため池百選」に選定されています。

6 しらほこ 白樺湖

【所 在】茅野市北山
【築 造】昭和21年(1946年)
【管理者】茅野市湖東豊原土地改良区

茅野市北山に広がる水田は、冷害により枯死した稲の3割が青立で実らないことがあったそうです。昭和5年、水が溜まって温かくなるため、蓼科高原にため池を築く工事が着手されました。戦争により昭和19年に一旦中止となりましたが、昭和21年、全区民の努力によりため池が完成しました。文字屋が石で覆った、水当番がけが開けられるようになっていたそうです。

上伊那エリア

伊那市、駒ヶ根市、辰野町、箕輪町、飯島町、南箕輪村、中川村、宮田村
お問い合わせ先 上伊那地域振興局農地整備課 ☎0265-76-6816

1 西天電幹線用水路 円筒分水工群

【所 在】辰野町、箕輪町、南箕輪村、伊那市
【築 造】大正8年～昭和14年
【管理者】上伊那郡西天電土地改良区

幹線用水路の建設工事後、林地の開田が行われましたが、人員による建設工事のため水持ちが悪く、水争いが絶えませんでした。そこで円筒分水工を設置し、水田の面積に応じた仕切りや穴の穴により公平に水が供給できるようにしました。現在でも利用されている円筒分水工は35基で、全国でも最大規模の円筒分水工群であり、平成18年度に土木学会選奨土木遺産に認定されています。

2 西天電幹線用水路

【所 在】岡谷市～伊那市
【築 造】昭和3年
【管理者】上伊那郡西天電土地改良区、長野県企業局

岡谷川岸～伊那市小沢までの天竜川西岸段丘にある約970haの水田を潤す幹線水路です。伊那市小沢の西天電発電所は、農業用水路の水が河川(小沢川)へ落ちる落差を利用して水力発電を行うために建設された施設です。令和4年には新しく公園も整備された地域の憩いの場となっています。

3 東天電 伝兵衛井共用頭首工

【所 在】辰野町
【築 造】昭和2年(1927年)
【管理者】辰野町東天電水利管理組合、下屋野区

東天電用水は1856年、伝兵衛井筋は1859年に築造されましたが、その後の水不足を解消するため、昭和2年に共同で取水する伝兵衛井が設置されました。表面に自然石を配置したコンクリート製の固定堰で、堰面上流側向方に強くアーチしていることから、流れる水との曲線美が美しく、日本の近代土木遺産(現存する重要な土木構造物)2,800選「土木学会」に認定されています。

4 木曾山用水

【所 在】塩尻市(旧塩川村)～伊那市上戸、中条
【築 造】明治6年(1873年)
【管理者】松本市奈良井川土地改良区、上戸中条水利組合

伊那と木曾を結ぶ権兵衛峠は、日本海と太平洋の分水嶺となっています。約140年にもおよぶ話し合いの末、明治6年、奈良井川の支流である白川から権兵衛峠を回る水路が完成し、分水嶺を越えて木曾から伊那へ用水を導くことができました。木曾の水を伊那へと厳格に分配するために「氷水(みずま)」を流し、現在でも通水に併せて水量を計る水相検査が行われています。「(まほらいな いいとこ百選)」に認定されています。

5 つやせき 館三郎の井

【所 在】伊那市荒井
【築 造】明治28年(1895年)
【管理者】横井水利組合

明治中期、天竜川西の高台では水の権利をめぐる争いが絶えませんでした。用水の必要性を痛感した西伊那村荒井の御子繁三郎(みこしばつやせき)は、私財を投げ打って上流の広大な台地に地下水脈を探し求め続け、明治28年ついに水脈を発見しました。水脈が見つかったら、僅は水になる。一帯の約40haの水田を潤したのを見届けると館三郎は自刃して果てました。「(まほらいな いいとこ百選)」に認定されています。

6 るくどう 六道の堤

【所 在】伊那市美芝
【築 造】嘉永元年(1848年)
【管理者】長野県美芝土地改良区

1848年、高瀬藩主、内藤頼章(なとうりやす)は六道原の開墾を行いました。藤沢川から取水し、針持樋道(ほこじさんどう)をトンネルで抜け、青沢に笠原を通り、六道原に至る約10kmの新しい水路を造りました。この池は標高の名所として地域の憩いの場となっており、また、堤には、蓬田の歌人といわれたたけ井上月舟の詩句「(ごごらに鶴(たず)の声聞く農かな)の句碑があります。「(まほらいな いいとこ百選)」に認定されています。

7 月蔵井

【所 在】伊那市高遠町
【築 造】弘化2年(1847年)
【管理者】月蔵井

高遠藩主の内藤頼章(なとうりやす)は藩財政の建て直しのために、各所に井路を開いて開田し、地の収収を回り、月蔵山を越え高遠に送り、沿線の用水をかんがいするとともに、武家の御用水武家屋敷の生活用水ともなりました。開削の記念碑は業師堂にあり、当時の関係者の名前が刻まれています。

8 伝兵衛井筋(駒ヶ鼻井筋)

【所 在】伊那市富原～東寄近
【築 造】天保4年(1833年)
【管理者】伊那市富原土地改良区

井筋は1658年に一旦開削しましたが、崩落など完成後の管理のため原新田村は多額の借金を背負うことになりました。杉島村(伊那市長谷)の伊東伝兵衛が原新田村と協議し、高瀬藩の許可を得て私費で改修を行い完成しました。昭和12年に春富井隧道、昭和33年に高遠ダムが完成し新しい用水路が造られたため、伝兵衛の隧道は、現在では地中に眠ってしまっています。

9 なかたさいり 中田切井

【所 在】駒ヶ根市赤穂
【築 造】明治7年(1874年)
【管理者】中田切井水利組合

中田切井左岸の赤穂・市場町・小町屋の3ヶ村(現駒ヶ根市)の福沢芝ら18人の有志が立ち上がり、中田切川から取水して原野地の開田を計画しました。1855年(後)より着手しましたが、水利権を持つ切井村はその申し出を断り、その後も平行線をたどる交渉が続きました。ようやく1872年に着工し、3年後の完成に至りました。「南原開墾の碑」には、有志18人の記録が残されています。

10 まよこさいり 横沢井

【所 在】飯島町七久保、中川村片桐
【築 造】明暦7年(1656年)
【管理者】七久保井水利組合

井筋の下流に多くの分水があり、築造後も水争いが絶えませんでした。1824年、従来の分水相による方法で解決せず、時間による分水方法に変更しました。横沢井は堤分の午前6時から午後4時の間とし、中川村側は午後4時から午前6時の間としました。現在では、七久保宮の上(大宮七窪神社西)において、北の井筋と南の井筋に6:4の割合で水を分ける方法で分水しています。

11 中尾の棚田

【所 在】伊那市長谷
【保全団体】Wakka Agri

南アルプスの麓に位置し、集落の民家とともにのどかな田園風景を形成しています。農業と肥料を一切使わない自然栽培により、主に海外市場をターゲットとした米の生産に取り組みしています。また、地元の大学との共同研究や講義等の受入等、学習の場も提供しています。

12 とうしんやま 荒神山ため池(たつの海)

【所 在】辰野町
【築 造】昭和44年(1969年)
【管理者】辰野町

1969年、沢尻川から600mポンプアップした水を温めて水田に配水する温湯ため池として完成しました。ブランド米「上伊那米」を生産する33haを潤しています。春には、150匹の鯉のぼりが湖上で泳ぎ、800本の桜が咲き誇る「荒神山(とうしんやま)」が開花されます。周辺一帯は、荒神山スポーツ公園として整備されており、白鳥やアヒルのいる親水公園は、町内外の人々に憩いの場として親しまれています。

山室の棚田

【所 在】伊那市高遠町
【保全団体】農事組合法人山室

山から川に向かって広がる、ほぼ整備された広大な田が目を惹きます。棚田の約8割の田んぼでは、「ひとごころ」や「美山錦」等の酒米が生産されており、それらを原料に地元酒造会社が生産する地酒は高い人気を誇っています。

13 せんいんづかじょうがいけ 千人塚城ヶ池

【所 在】飯島町七久保
【築 造】昭和11年(1936年)
【管理者】七久保井水利組合

北山域の空堀を利用して造られた農業用ため池で、中央アルプスを屏風としたすばらしい景観に恵まれています。春は堤の千本桜、つつし、あじさい等が咲きほこり、秋は紅葉に四季を通じて楽しむことができ、渡り鳥も飛来します。千人塚の歴史は古く、1582年、この地にあった北山城が織田信長の軍勢に攻め落とされ、その戦で亡くなった戦士の墓とされたといわれています。

14 与四郎垣外の横井戸

【所 在】箕輪町富田
【築 造】明治42年(1909年)
【管理者】耕作者

横井戸を掘るなら岳(駒ヶ岳)に向かって掘れという言い伝えがあり、当時の横井戸は全て西か、西南西方向に向かて掘られています。限られた湧き水を最大限に利用するため、横井戸の排水出口に掛時計を置き、時間を定めて掘りかきを行い「掛時計」といふかんがひ方法が完成しました。文字屋が石で覆った、水当番がけが開けられるようになっていたそうです。

15 宮田井(黒川井)

【所 在】宮田村
【築 造】承応3年(1654年)頃
【管理者】宮田村

江戸時代、扇状地の上流で取水し、用水路を掘って水を下流へ送ることが考えられ、太田切川の左岸に開削されました。現在では、黒川と発源所から放流される水の約半分が取り入れ、排水トンネル入り口で流量調節した後、余った水は太田切川へ戻っています。宮田井(黒川井)は、「下流へ行く」とも「上流へ行く」とも「黒川の経」で有名な黒川へと名を変えます。